

美術教育の方針 (一)

黒田清輝

美術教育の方針は將來必然の趨勢に隨ふべし。

今や維新の政變ありてより茲に三十餘年、是人生二代の變り目とも云ふべき年時を経て一たび破壊したる社會も漸く其組織を定めんとし、社會の精華たる藝術は數回の動搖を経て其端緒につき、將に着實なる發達期に向はんとするの時なり、此際に臨みて美術の教育に適當の方針を確定し、其進路を開かん事は極めて緊要の問題なりとす。然れども此問題は、輕々に一決せらる可らず、藝術は時代に應じて社會に現はる、自發的產物にして、強て方針を定めて、其發達を左右すべきものに非ず、助長の方針は却て危害を招くべく、寧ろ自然の發達に任するに如かず、公正なる着眼を以て現今の時代を觀察し、既往の經歷と現時の實狀とに鑑みて將來の趨勢を斷定し、其最も自然に且最も正當なる傾向を豫知して、將に就かんとする路を擴開せん事、是を採るべき方針とは云ふなり、

▲世界競進の時代

今日は何なる時代なるかといふに、實に世界競進の時代なり、器械の便利日に開けて、世界の面積は時間の上より縮減せられ曾て絶東遠遠の一隅に僻在したる吾人の邦國も、競進の渦中に投せられ、泰西の氣運は直ちに我事物に影響を及ぼせり、況んや藝術には、素より邦國の領界なく、相互交換して新しき精華を發せんとするに如何なる強力の帝權あるも、之を避くるの術なからん、此の如き時代にありて先づ斥けざるを得ざるものは、保守

思想と鎖國思想にして、苟も事物の發達を欲するものは、須く眼を開きて世界の形勢を熟察せざる可らず東洋の藝術が歐洲に知られたること日猶淺しと雖、彼の技法に革新の機動を與へて、着々として其面目を改め、種々の技術に日本趣味の頻りに採用せらるゝは事實なり、而かも歐洲の藝術には確乎たる基礎の存するあり、其趣味の變化は極めて面白き結果を現はせり、或は此状態を見て深く其實を究めず、西歐の美術は漸く日本化したるべしとなし、曾て某外客が、投機的論鋒を鼓舞して、真正の美術は獨り本邦に存すといへる諛言を信じ、舊法を墨守して敢て時代の遷移を顧みざるが如きあらば、我的長處は悉く歐人の爲に活用せられて、我藝術は遂に無能の涸泉朽木となり果つべき徴候は既に今日一部の上に顯はれたるに非ずや、されば我藝術を開發するの策を議するに先ちて、泰西藝術の性質を知りて、其向後の大勢を測らん事至當の順序なるべし、何となれば彼の形勢は以て我將來を卜するを得べければなり

『二六新報』明治三十三年三月二十五日